The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文系大学院留学生の論文執筆過程における困難 : 学位論文を書いた経験のある学習者への調査をもとに
Author(s)	小森, 万里
Citation	日本語・日本文化. 2025, 52, p. 37-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

文系大学院留学生の論文執筆過程における困難

―学位論文を書いた経験のある学習者への調査をもとに―

小森　万里

1．はじめに

日本の大学の大学院に進学する留学生は年々増えており、独立行政法人日本学生支援機構の「2023（令和 5）年度外国人留学生在籍状況調査結果」によれば 2023 年度の総留学生数 279,274 人のうち大学院留学生は 55,539 人で、約 20％を占めている。また、文部科学省の「学校基本調査／令和 6 年度高等教育機関 学校調査 学校調査票（大学・大学院）」の「専攻分野別 外国人学生数（大学院）」を見ると、社会科学分野の大学院留学生[i)] は 11,960 人（同調査の外国人学生数の 19.0％）、人文科学分野の大学院留学生は 5,870 人（同 9.3％）で、大学院留学生の約 30％をこれらの文系大学院留学生が占めていることがわかる。

このような文系大学院留学生は、向井・金山（2019）が述べるように、「日本文化・社会を深く理解し、日本語による研究を母国に伝えてくれる貴重な人材である」と言えるだろう。独立行政法人日本学生支援機構の「2022（令和 4）年度外国人留学生進路状況調査結果」の「専攻区分別進路状況調査結果【大学院】」によれば、2022 年度中に修了した社会科学・人文科学分野の大学院留学生 5,961 人のうち、社会科学では日本国内に就職・進学した者（その他も含む）の数が 2,186 人、人文科学では 984 人となっている。また、出身国・地域に就職・進学した者（その他も含む）は社会科学では 1,784 人、人文科学は 529 人となっており、国内への就職・進学数と大きく変わらない人数の大学院修了者が出身国・地域でキャリアを形成していることがわかる。

このように、将来日本国内外で専門を生かして活躍する可能性のある人材である大学院留学生が修士論文や博士論文を書き上げて学位を取得するということ

は、彼らの将来のキャリア形成に非常に重要であると考えられる。そして、学位論文執筆を通して発達させた力や特性は、彼らのより豊かなキャリア形成のために発揮され、応用されていくものであることが望まれる。

しかし、文系大学院留学生が論文を書く際、さまざまな困難があることが予想される。たとえば、個人研究態勢であるという文系特有の研究態勢に起因する難しさがあるだろう。また、彼らにとって外国語である日本語で論文執筆をしなければならないために、日本語母語話者以上の苦労があることも推察される。そのため、文系大学院留学生が学位論文を書く際に直面する困難について知ることは、大学院留学生教育に大きな示唆を与えるだろうと思われる。

本研究の目的は、日本語で文系分野の修士論文または博士論文を書いた経験のある日本語非母語話者に対するアンケート調査結果の分析により、文系大学院留学生が日本語で学位論文を執筆する中で経験した困難がどのようなものであるかを明らかにすることである。

２．先行研究

2.1 大学院留学生の困難とその要因

文系大学院留学生の困難については、園田（2009）が研究効力感の喪失や研究コミュニティの希薄さを語る留学生が多いとしているが、このような困難にはさまざまな要因が関わっていると考えられる。たとえば、黄（2015）では、大学院留学生の母国の教育制度との違いからゼミという授業形態に不慣れなために慎重で遠慮がちな参加になることがあると指摘されている。また、胡（2016）や馬場（2019）においては、研究に対する認識不足や専門知識の乏しさがあると大学院留学生が感じることなども、研究開始当初の不安につながり得ることが述べられている。不安については、田（2019）が学習背景の違いにより既に身についている力や授業を通して達成できる学びが異なるため、レポートを書く練習をする授業を受けても不安が十分に解消されなかったり新たな不安が生じたりするケースもあることが指摘されている。また、実践共同体であるゼミや研究科などの研究コミュニティの活動への周辺的参加が十全的参加（レイヴ＆ウェンガー1991/1993）に向かうためには、他者による肯定や個人の意志、自己効力感など

を通して実践共同体に入る正統性が確保されることが重要であると李（2011）や郭（2019）や小森（2022）において指摘されている。このように、大学院留学生が積極的に研究コミュニティに入っていき、研究を進め、論文を執筆するためには、授業形態への慣れ、研究に対する認識や専門知識の習得、学習背景、人間関係の構築、情意的特性の発達など、さまざまな要因が関係していることがわかる。

では、大学院留学生が学位論文執筆に向けて研究を進めていけるようにするためにこれまでどのような教育実践がなされているだろうか。

2.2 日本で学位取得を目指す文系大学院留学生への教育

本項では、日本で学位取得を目指す大学院留学生に対する教育実践のうち、主に文系の大学院留学生を対象とした報告をみていく。

佐藤（2006）は「研究のための日本語スキル」という科目において、サンプル論文の読解を通して論文の構成や要旨の書き方、序論・本論・結論の書き方などを学ぶとともに、書き言葉や文型・表現など日本語面の学習も行い、最終的に 3 ページ程度の日本語論文を書くことを課し、日本語による効果的な口頭発表および論文作成のスキルを身につけることを目指した授業実践をしている。また、徳田（2017）は「日本語論文指導講座」という授業で、テーマ選び、文献の探し方、序論・本論・結論の書き方などを通して受講生が小規模な論文を書く経験ができるような授業を実践している。さらに、木戸（2018）は、人文系大学院の言語文化科目および専門科目の授業で、文献や教科書の講読、口頭発表、ミニレポート、ポスター発表、期末レポートなどを課すことによって異なる種類の口頭発表や文章作成を複数組み合わせることで専門性を高めるための言語技術を育成する授業実践をしている。このように、小規模な論文の作成を通して論文を書くスキルの育成をする実践が複数報告されている。

一方、村岡（2014）は学習へのメタ認知能力を高めることを目指し、テキスト分析タスクを用いた授業実践を行っている。このようなタスクにより、論文とは何かという知識の総体である論文スキーマの形成を促すことが研究留学生に必要であることが村岡（2014）によって主張されている。この論文スキーマの形成を

目標として、村上（2018）は大学院留学生向けの授業を実践し、論文の構成やジャンル別の文体などの知識の習得にモデル論文分析を取り入れた実践を行っている。また、向井（2018）のように、大学院留学生に自分の研究に必要な先行研究論文の構成や表現の分析の発表を課すとともに、各自の執筆途中の原稿をクラスで検討するという OJT のような形態により、時間的に制約のある大学院留学生であっても各分野においてどのような論文が求められるのかを学び、同時に、各自が直面している課題を認識できるようにした実践もある。これらは、論理的・批判的思考力や、研究や論文をメタ的に捉える思考の育成を行う実践であると捉えることができる。

その他、向井・金山（2019）では、古い文献を読み解く必要のある分野の留学生向けに「学問用語の知識」「文語文献解読のための知識」のための特別講座の実施について報告されている。専門知識の習得のための授業実践により大学院留学生の研究を支える体制を作る実践であると言えるだろう。

以上のように、研究や論文執筆を支えるための日本語面やスキル面での教育に加え、思考力の育成や、専門知識を得るための教育も実践されていることがわかる。しかし、2.1 で挙げられたような人間関係構築や情意的特性の発達のための教育研究については、管見の限り、まだ十分とはいえない状況であると思われる。

2.3 大学院留学生教育における課題

2.1 で大学院留学生が順調に研究を進め論文を執筆していくためには人間関係構築や情意面の要因も関わっていると述べたが、2.2 にみられるように、従来の大学院留学生教育における言語面やスキル面、思考面、専門知識面の育成をめざした実践報告に比べると、人間関係構築力も含めた情意的特性の発達に関する実践はあまり多くなされていないようである。Discoll & Wells（2012）によれば、情意的特性というのは知識やスキルや能力などの知的特性ではなく、それらの知的特性をどう使い応用するかを決定づけるもので、特にライティング教育においては価値、自己効力感、原因帰属、自己調整という 4 つの情意的特性が重要であるとされる。大学院留学生教育においても、このような情意的特性の発達と、そ

れらの特性を学習者が発揮できるようになるための教育が必要であると思われる。この情意的特性に関する研究には小森（2022、2023a、2023b）がある。

小森（2022、2023a）は、母語でのアカデミック・ライティング教育を受けた経験のない大学院留学生のケーススタディを通して、目標志向性により不安の内容や援助要請への態度が異なること、自尊感情や自己効力感を促す出来事が実践共同体への正統的周辺参加の実感につながり、それが情意面の切り替えにつながり得ること、不安があっても達成目標へと自らを方向づけていくためには没頭や開放性の思考態度が発揮されることが関わっていることを明らかにした。また、大学院留学生が論文スキーマを発達させ能動的に研究を進められるようになるためには適切な援助要請が重要となることも指摘されている。

小森（2023b）では、母語での論文作成経験のある大学院留学生について、形式面、内容面、手続き面において母語での論文スキーマとの違いがあることで不安が大きくなったり、母語からの転移が見られたりするなどの困難があることが指摘されている。また、論文作成面、世界情勢面、個人的状況面などにおいて、執筆開始時には想定していなかったコントロール不能な要因が生じることにより、自責の念や無力感などを抱く可能性があるということも明らかにされた。これらの困難への対処には感情制御や環境制御といった意思的制御が必要であることが指摘されている。

以上のような大学院留学生の論文作成に必要な情意的特性についての研究はいずれも少数の大学院留学生に対するインタビュー調査によるものである。冒頭で述べたように大学院留学生数は年々増えており、アカデミック・ライティングの過程での困難はさらに多様であることが推測されるため、量的な調査も必要であると思われる。そこで、本研究では、日本語で学位論文を書いた経験のある日本語非母語話者の困難を量的に調査する。

2.4 本研究の分析枠組み

本研究では日本語での論文執筆過程における困難を調査するが、その分析枠組みとして、二通ほか（2004）の「アカデミック・ライティングの構成要素」と、小森（2022, 2023a, 2023b）で大学院留学生の困難に関わるものとして取り上げら

れた「援助要請」「情意」「環境」を分析枠組みとして援用する。

二通ほか（2004）の「アカデミック・ライティングの構成要素」とは、図 1 に見られるように、学術分野共通の語彙、表現、文型、文体などの「言語」、アカデミックな文章の作成プロセスや、問題の設定、情報収集、引用、要約などのスキルを含む「技能」、問題意識や論理的思考、客観性などの「基礎」、専門知識や専門用語、専門のライティングに関する約束事などを含む「専門」のことである。大学・大学院での学習や研究などを目的とした文章およびその作成はこれら 4 つの構成要素から成るとされている。2.2 で挙げたさまざまな授業実践もこれらの構成要素を部分的あるいは全体的に教育する内容となっており、大学院生の論文執筆過程での困難を分類する際の基準になると考えられる。本研究では「言語」「技能」「基礎」「専門」の 4 領域を大学院留学生の困難を分類する際に援用する。

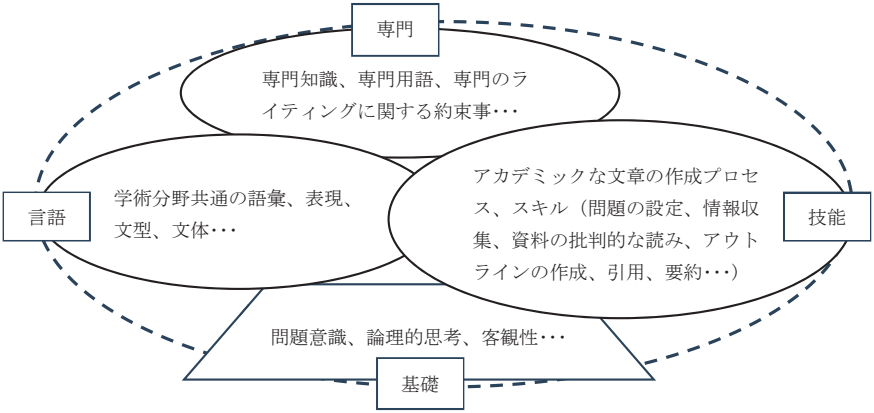

図 1　アカデミック・ライティングの構成要素（二通ほか 2004 による）

情意的特性に関わる困難を分析するための領域としては、小森（2022a、2022b、2023）から、大学院留学生の困難とその困難への対処には「援助要請」「情意」「環境」といった要素が関わっているとされている点を援用する。「援助要請」とは、学習者が新たな限界に挑む必要がある場合に、他者に頼ったり専門

家に援助を求めたりすることである。これを適切に行うためには、援助要請の必要性、援助要請の内容、援助要請の対象者についての意思決定や、それを支える対人的リソースと自己内部リソースを持ち合わせている必要があると言われている（ニューマン 2008/2009）。また、本研究での「情意」とは、感情や思考態度、動機づけ、不安、自尊心、自己効力感、目標志向性など大学院留学生の内面に関わるもの（小森 2022 の「情意要因」）とする。そして、本研究における「環境」とは、小森（2023b）で指摘された世界情勢面、経済的側面、家族の状況、仕事との両立、健康面など大学院生を取り巻く状況で、論文執筆行動に間接的に関わるものを指す。これら 3 つの領域も本研究の分析の枠組みとして援用した。

3．調査の概要

本研究では、日本語で文系分野の修士論文または博士論文を書いた経験のある日本語非母語話者 120 人にアンケート調査を行った。調査期間は 2024 年 5 月 9 日から 6 月 5 日である。調査協力者の母語と、母語別の人数は表 1 の通りである。

表1　調査協力者の母語と母語別の人数

母語	人数	母語	人数	母語	人数
中国語	52	スンダ語	3	中国語（台湾）	1
タイ語	24	ジャワ語	3	ハンガリー語	1
インドネシア語	10	ロシア語	2	ビルマ語	1
クメール語	7	ブルガリア語	2	モンゴル語	1
韓国語	6	アラビア語（エジプト）	1	ルーマニア語	1
ベトナム語	6	オランダ語	1	無回答	1
シンハラ語	3	広東語	1		

※母語を 2つもつと回答した調査協力者もいるため、人数の合計は 120 より多い。
※母語の表記はすべて調査協力者の表現をそのまま記載している。

調査協力者が日本語で執筆した修士論文または博士論文の分野は、表 2 の通りであった。修士論文と博士論文のいずれも人文科学の分野で執筆した調査協力者が多いことから、本調査の結果は人文科学の分野での特徴がより強く反映されている可能性があることに注意する必要がある。

表 2　調査協力者の日本語による学位論文の分野

修士論文の分野	人数	博士論文の分野	人数
人文科学	104	人文科学	49
社会科学	13	社会科学	6
日本語での執筆経験はない	3	日本語での執筆経験はない	65

また、調査協力者のアカデミック・ライティング経験（以下、AW 経験）を知るために「あなたの母国や別の留学先など、日本以外の国の高等教育機関で論文（卒業論文や修士論文や博士論文など）を書いた経験がありますか」と質問したところ、「はい」が 52 人（43.3%）、「いいえ」が 68 人（56.7%）であった。

学位論文執筆の困難に関する質問項目は、2.4 で述べた二通ほか（2004）と小森（2022、2023 a、2023 b）からの 7 つの領域（言語、技能、基礎、専門、援助要請、情意、環境）に関するものを 26 問[ii] 作成し（表 3）、「強くそう思う」5 点、「そう思う」4 点、「どちらとも言えない」3 点、「あまりそう思わない」2 点、「ぜんぜんそう思わない」1 点という 5 件法で回答を得た。

表 3　質問項目（選択式回答）

言語	a. 論文にふさわしい日本語（文体・語彙・表現など）で書くことが難しかった
	b. 自分の書きたい内容を、日本語で的確に表現することが難しかった
	c. 参考文献の読解が難しかった
技能	d. 先行研究を適切に引用することが難しかった
	e. 論文をどのような構成で書けばよいのかがわからなかった
	f. 母語（または他の言語）と日本語では、論文の書き方（構成・書くべき項目・論文作成手順など）が違うので、どう書くべきかを考えるのが難しかった

基礎	g. 研究テーマ（問い）を設定することが難しかった
	h. 論理的に考え、論を組み立てることが難しかった
	i. 先行研究を批判的に読むことが難しかった
専門	j. どんな参考文献を読むべきなのかがわからなかった
	k. 研究に必要な資料を手に入れることが難しかった
	l. 研究テーマについての専門的知識が不足していた
	m. 研究の進め方がわからなかった
援助要請	n. 指導教員に研究上の悩みを相談することができなかった
	o. 大学院生仲間に研究上の悩みを相談することができなかった
	p. 研究上の悩みがある時に相談する人がいなかった
情意	q. 心理的に落ち込んだ状態になった
	r. 不安な気持ちになった
	s. 自信がなくなった
	t. モチベーションが下がった
	u. 自分は大学院にいる資格がないと思った
環境	v. 学費や生活費等が払えないかもしれないなど経済的に不安定な状態になった
	w. 仕事やアルバイトと、研究との両立が難しかった
	x. 母国の家族について心配なことが起こった
	y. 自分自身の病気やケガなどで研究が進められなくなった
	z. 世界的な感染症拡大が起こり、移動が制限された

この 26 項目以外に、自由記述式で以下 2 つの質問に対する回答を得た。

① a ～ z 以外に、あなたが経験した困難があれば書いてください。

②日本語による論文作成過程で、あなたにとって一番困難だったのは、どんなことでしたか。差し支えのない範囲でくわしく書いてください。

４．調査の結果

4.1 言語領域についての困難

学術分野共通の語彙、表現、文型、文体など、日本語面に関わる言語領域についての結果は表 4 の通りである。

表 4　言語領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
a. 論文にふさわしい日本語で書くことが難しかった	人数	0	18	6	64	32	120
	構成比	0.0	15.0	5.0	53.3	26.7	100.0
b. 自分の書きたい内容を日本語で的確に表現することが難しかった	人数	1	13	10	67	29	120
	構成比	0.8	10.8	8.3	55.8	24.2	99.9*
c. 参考文献の読解が難しかった	人数	6	35	24	36	19	120
	構成比	5.0	29.2	20.0	30.0	15.8	100.0

* 小数点 2 位以下を四捨五入しているため総計が 100％にならない。

論文にふさわしい日本語（質問 a）や日本語での的確な表現（質問 b）について「強くそう思う（5 点）」「そう思う（4 点）」という回答がいずれも 80.0％あり、学位論文を執筆するような上級レベルの日本語能力をもつ者であっても、論文を執筆するための日本語については難しいと感じていることがわかった。

参考文献の読解（質問 c）は、「強くそう思う」「そう思う」が 45.8％、「あまりそう思わない（2 点）」「ぜんぜんそう思わない（1 点）」が 34.2％で、困難だと感じる者とそうではない者に分布が分かれる結果となった。

4.2 技能領域についての困難

アカデミックな文章の作成プロセスや、アウトライン作成、引用などのスキル面に関わる技能領域についての困難は表 5 の通りである。

表 5　技能領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
d. 先行研究を適切に引用することが難しかった	人数	6	27	19	44	24	120
	構成比	5.0	22.5	15.8	36.7	20.0	100.0
e. 論文をどのような構成で書けばよいのかがわからなかった	人数	8	30	29	35	18	120
	構成比	6.7	25.0	24.2	29.2	15.0	100.1*
f. 母語（または他の言語）と日本語は論文の書き方が違うので、どう書くべきかを考えるのが難しかった	人数	13	38	34	23	12	120
	構成比	10.8	31.7	28.3	19.2	10.0	100.0

* 小数点 2 位以下を四捨五入しているため総計が 100%にならない。

技能領域では、先行研究の適切な引用（質問 d）が難しいと感じるかどうかについて「強くそう思う」「そう思う」が 56.7%と 6 割近くいることがわかった。一方、論文の構成（質問 e）は「強くそう思う」「そう思う」が 44.2%、「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」が 38 人（31.7%）と回答者の分布が分かれる結果となった。

母語や他言語との違い（質問 f）からくる困難については、「強くそう思う」「そう思う」が 29.2%であった。AW 経験者の中で母語や他言語との違いが困難だとする者は 52 人中 13 人（AW 経験者の 25%）であり、困難ではないとする者は 26 人（同 50%）であったため、別の言語であっても AW 経験があるほうが論文の書き方について戸惑うことは少ない傾向にあることが示唆された。一方 AW 未経験者の中では困難だと回答した者は 68 人中 22 人（AW 未経験者の 32.4%）、困難ではないと回答した者は 25 人（同 36.8%）と回答者の分布が分かれる結果となった。

4.3 基礎領域についての困難

問題意識や論理的思考、批判的思考などの思考力に関わる基礎領域についての困難は表 6 の通りである。

表 6　基礎領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
g. 研究テーマ（問い）を設定することが難しかった	人数	4	23	12	47	34	120
	構成比	3.3	19.2	10.0	39.2	28.3	100.0
h. 論理的に考え、論を組み立てることが難しかった	人数	4	21	14	52	29	120
	構成比	3.3	17.5	11.7	43.3	24.2	100.0
i. 先行研究を批判的に読むことが難しかった	人数	4	18	21	49	28	120
	構成比	3.3	15.0	17.5	40.8	23.3	99.9*

* 小数点 2 位以下を四捨五入しているため総計が 100%にならない。

基礎領域については、問いの設定[iii]（質問 g）、論理的思考（質問 h）、批判的思考（質問 i）のいずれにおいても、「強くそう思う」「そう思う」が 67.5%、67.5%、64.1%と約 6 ～ 7 割が難しいと感じていることがわかった。

4.4 専門領域についての困難

専門知識や専門用語、専門のライティングに関する約束事などの専門領域についての困難は表 7 の通りである。

表 7　専門領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
j. どんな参考文献を読むべきなのかがわからなかった	人数	6	40	28	30	16	120
	構成比	5.0	33.3	23.3	25.0	13.3	99.9*
k. 研究に必要な資料を手に入れることが難しかった	人数	10	39	23	32	16	120
	構成比	8.3	32.5	19.2	26.7	13.3	100.0
l. 研究テーマについての専門的知識が不足していた	人数	2	18	24	42	34	120
	構成比	1.7	15.0	20.0	35.0	28.3	100.0
m. 研究の進め方がわからなかった	人数	5	31	31	40	13	120
	構成比	4.2	25.8	25.8	33.3	10.8	99.9*

* 小数点 2 位以下を四捨五入しているため総計が 100%にならない。

専門領域では、研究テーマについての専門的知識の不足（質問 l）に対して「強くそう思う」「そう思う」が 63.3%と高い構成比であったことがわかる。

参考文献の選定（質問 j）と資料の収集（質問 k）については、「強くそう思う」「そう思う」の合計構成比が各々 38.3%と 40.0%、「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」が各々 38.3%と 40.8%と回答者の分布が分かれた。

研究の進め方（質問 m）については、「強くそう思う」「そう思う」が 44.1%、「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」が 30.0%で、困難だと感じる人がやや多い結果となった。この質問 m について、困難だと感じた人の中で AW 経験がある人は 52 人中 22 人（AW 経験者の 42.3%）、AW 経験がない人は 68 人中 31 人（AW 未経験者の 45.6%）とほぼ同程度の構成比であった。この結果から、AW 経験の有無と研究の進め方に困難を感じるかどうかは強い関連があるわけではなく、AW 経験があっても研究の進め方に困難を感じる者は一定数いるということがわかる。

4.5 援助要請領域についての困難

自分が新たな限界に挑む必要がある場合に他者に頼ったり専門家に援助を求めたりする援助要請は、人間関係構築にも関連する領域であると考えられる。援助要請領域についての結果は表 8 の通りである。

表 8　援助要請領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
n. 指導教員に研究上の悩みを相談することができなかった	人数	49	44	8	12	7	120
	構成比	40.8	36.7	6.7	10.0	5.8	100.0
o. 大学院生仲間に研究上の悩みを相談することができなかった	人数	37	40	21	15	7	120
	構成比	30.8	33.3	17.5	12.5	5.8	99.9*
p. 研究上の悩みがある時に相談する人がいなかった	人数	39	37	24	13	7	120
	構成比	32.5	30.8	20.0	10.8	5.8	99.9*

* 小数点 2 位以下を四捨五入しているため総計が 100%にならない。

指導教員との相談については77.5%が「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」と回答した一方で、15.8%は相談ができなかったと感じており、少人数ではあるが指導教員との人間関係構築の上で難しさを感じる者もいることがわかった。本調査の自由記述式回答欄には最も困難だったことについて、指導教員との関係性について悩みがあったという記述が複数あり、相談ができなかった者にとっての困難は大きかったということが示唆される。

また、大学院生仲間への相談不可（質問 o）と相談相手の不在（質問 p）は回答者がほぼ重なっている点も特徴的であった。自由記述式回答欄には最も困難だったことについて、日本語面でのチェック、学生生活、日本での生活、各種奨学金の申請などについて気軽に相談できる相手がいない点についての記述が複数見られた。個人研究態勢の大学院留学生にとって、研究コミュニティの外で研究上の悩みを相談できる人がいるケースは多くなく、同じ研究コミュニティ内で相談できる環境が整えられること重要であると言える。

4.6 情意領域についての困難

大学院留学生の内面に関わる感情や動機づけや自尊心などの情意領域についての結果は表 9 の通りである。

表 9　情意領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
q. 心理的に落ち込んだ状態になった	人数	8	25	25	36	26	120
	構成比	6.7	20.8	20.8	30.0	21.7	100.0
r. 不安な気持ちになった	人数	5	20	12	54	29	120
	構成比	4.2	16.7	10.0	45.0	24.2	100.1*
s. 自信がなくなった	人数	9	24	25	37	25	120
	構成比	7.5	20.0	20.8	30.8	20.8	99.9*
t. モチベーションが下がった	人数	10	34	32	24	20	120
	構成比	8.3	28.3	26.7	20.0	16.7	100.0
u. 自分は大学院にいる資格がないと思った	人数	34	30	23	18	15	120
	構成比	28.3	25.0	19.2	15.0	12.5	100.0

* 小数点 2 位以下を四捨五入しているため総計が 100%にならない。

援助要請の領域については、不安な気持ち（質問 r）が 69.2%と約 7 割にのぼることがわかった。また、心理的落ち込み（質問 q）と自信の喪失（質問 s）は「強くそう思う」「そう思う」が各々 51.7%、51.6%と約半数が経験することもわかった。一方、モチベーションが下がる経験をする人は「強くそう思う」「そう思う」を合わせて 36.7%であり、不安や心理的落ち込みや自信喪失ほど構成比は高くなく、不安や落ち込みがあってもモチベーションが下がるとは限らないことがうかがわれる。大学院にいる資格がない（質問 u）と感じた人は 27.5%おり、3 ～ 4 人に 1 人は研究コミュニティへの参加に難しさを感じている様子が示唆された。

4.7 環境領域についての困難

大学院生を取り巻く状況で、論文執筆行動に間接的に関わる環境領域についての結果は表 10 の通りである。

表 10　環境領域についての困難

	点数	1	2	3	4	5	計
v. 学費や生活費等が払えないかもしれないなど、経済的に不安定な状態になった	人数	48	31	18	13	10	120
	構成比	40.0	25.8	15.0	10.8	8.3	99.9*
w. 仕事やアルバイトと、研究との両立が難しかった	人数	31	24	29	25	11	120
	構成比	25.8	20.0	24.2	20.8	9.2	100.0
x. 母国の家族について心配なことが起こった	人数	39	30	14	23	14	120
	構成比	32.5	25.0	11.7	19.2	11.7	100.1*
y. 自分自身の病気やケガなどで研究が進められなくなった	人数	69	24	11	10	6	120
	構成比	57.5	20.0	9.2	8.3	5.0	100.0
z. 世界的な感染症拡大が起こり、移動が制限された	人数	45	17	17	22	19	120
	構成比	37.5	14.2	14.2	18.3	15.8	100.0

仕事やアルバイトと研究との両立（質問 w）や、母国の家族の不安要素（質問 x）について「強くそう思う」「そう思う」が 30.0%、30.9%で、約 3 人に 1 人の割

合で困難だと感じていることがわかった。また、感染症拡大による移動制限（質問 z）も 34.1%が「強くそう思う」「そう思う」であり、困難であったとわかる。

経済的不安定（質問 v）や自分自身の健康上の不安（質問 y）は「強くそう思う」「そう思う」が各々 19.1%、13.3% であることから、環境領域については大学院留学生自身の状態よりも、家族や世界情勢などの外因的な困難をより大きなものと捉えていることもうかがえた。

5　調査結果の分析と考察

5.1 大学院留学生にとって最も困難だったこと

本項では、4 節の分析結果を自由記述式で質問した「日本語による論文作成過程で、あなたにとって一番困難だったのは、どんなことでしたか。差し支えのない範囲でくわしく書いてください」の回答データとともに考察していく。自由記述式で得たデータの分析方法は以下の通りである。

1. 自由記述を内容ごとに「／」で区切る。
   例 1)「日本語能力と専門知識が足りないと思い／自信がなくなった時があります。」
2. 1 で区切った断片を 7 領域のいずれに当てはまるかを考え分類する。1 つの断片を複数の領域に分類する場合もある。
   例 2)「日本語能力と専門知識が足りないと思い」
   →言語領域と専門領域に分類
   例 3)「自信がなくなった時があります」
   →情意領域に分類
3. 各領域のサブカテゴリーを【　】で表示（コーディング）
   例 4)「日本語能力と専門知識が足りないと思い」
   →言語領域【日本語能力の不足】、専門領域【専門知識の不足】
   例 5)「自信がなくなった時があります」
   →情意領域【自信の喪失】

1 ～ 3 の手順でコーディングを行った結果、各領域の言及数をまとめたのが表 11 である。最も困難であったことについては言語の領域が最も多く、外国語である日本語で論文を書くということの困難度が高いことが示唆される。

表 11　最も困難であったことについての言及数

領域	言語	技能	基礎	専門	援助要請	情意	環境
言及数	42	17	40	36	8	23	2

以下、各領域についてどれぐらいの言及があったか（言及数）、どのようなサブカテゴリーに言及があったか、それらからどのようなことがわかるかという点について、分析、考察する。

言語領域についての言及数は 42 であった。自由記述式回答には 4.1 の選択式回答と同様に【論文にふさわしい日本語】や【的確な表現】などの記述が多く、論文を書く段階にある日本語上級レベルの大学院留学生であっても論文執筆に必要な日本語の運用が困難だと感じていることがうかがえた。また、【参考文献の読解】については、漢字が多いために読むのに時間がかかること、読んだ内容の理解に時間がかかることが困難として挙げられていた。

技能領域についての言及数は 17 であった。4.2 では【適切な引用】が困難であったとの回答が多かったが、自由記述式回答からは、【先行研究の選定】【先行研究の整理】【情報のまとめ方】などが最も困難だとしている記述が多くあった。技能については収集した情報の取り扱いに困難を感じる場合が多いと考えられる。

基礎領域についての言及数は 40 であった。4.3 では、【問いの設定】【論理的思考】【批判的思考】のすべてにおいて 6 割以上の大学院留学生が困難であると回答していたが、自由記述式回答でも同様に【問いの設定】【論理的思考】【批判的思考】の記述が多く、加えて【計画の実行力】【思考の言語化】などの記述もあり、母語であるか日本語であるかにかかわらず必要とされる思考力や実行力の不足を感じていることがわかった。

専門の領域についての言及数は 36 であった。4.4 の選択式回答の結果と同様、

自由記述式回答においても【専門知識の不足】の記述が多くあった。専門分野に関しては、研究の意義や独自性を示すこと、理論・分析の枠組み選定、実験のデザイン、研究方法の示し方、考察の深さなど、困難の記述は多様であり、自分の専門知識が不足しているためにこれらに困難を感じたのだと捉えている様子がうかがえた。

援助要請領域に関する言及数は 8 であった。4.5 の選択式回答で【大学院生仲間への相談不可】と【相談相手の不在】の回答者がほぼ重なっていると述べたように、実践共同体の中でも実践共同体の外でも相談できる相手が見つけられず孤立した状態になる大学院留学生が一定数いることがうかがわれる。また、【相談相手の不在】には、チューター制度などサポート役を申請する制度が不在であったこと（制度の不在）、制度はあっても指導教員の方針で制度が利用できなかったこと（制度の利用不可）、学術的な文章を添削できる母語話者が周囲にいなかったこと（適切な援助要請対象者の不在）などが挙げられていた。さらに、【複数教員とのコミュニケーションの難しさ】に言及する回答もあり、教員ごとに異なるコミュニケーションスタイルにどう対応し、研究相談をすればよいかに苦慮する場合もあることがうかがわれた。

情意領域に関する言及数は 23 であった。4.6 の選択式回答で多かった【不安な気持ち】【心理的な落ち込み】【自信の喪失】のほか、【指導教員の指導への疑念】【目指す水準に対する自己評価の低さ】【焦りと自分への疑い】【自己否定】【モチベーションの低下】【辛い感情】【心身の不調】などさまざまなマイナスの情意に関する記述があった。小森（2023a）にもあるように、論文執筆過程では多くの書き手がマイナスの情意を経験するものであるが、大学院留学生は執筆経験の少なさから、誰でも経験することであるとは思えず自分を責めてしまう傾向があるのではないかと考えられる。

環境領域に関する言及数は 2 であった。4.7 の選択式回答から得られた【仕事と研究の両立】【母国の家族の問題】【世界的感染症拡大による移動制限】といった外因的な困難のほか、自由記述式回答では【経済的不安定】について、発表や投稿のための費用の捻出が困難であるという記述があった。

ここまでをまとめると、大学院留学生にとって最も困難なものは以下のような

点であると言える。

・言語：論文執筆に必要な日本語の運用（特に論文にふさわしい日本語の運用と日本語での的確な表現）や、先行研究の読解が困難である。
・技能：収集した情報の取り扱いが困難である。
・基礎：母語であるか日本語であるかにかかわらず必要とされる思考力や実行力の不足を感じている。
・専門：専門知識の不足により、研究の意義を示すことや適切な研究デザイン、考察の深さなどが十分でないと感じている。
・援助要請：相談相手の不在により悩みを相談できないことに困難を感じる。
・情意：不安、精神的落ち込み、自信の喪失など、さまざまなマイナスの情意を経験する。
・環境：主に外因的な環境要因が論文執筆を困難にする。

5.2 その他の困難

自由記述式の質問では、「a ～ z 以外に、あなたが経験した困難があれば書いてください」についての回答も得た。4.8.1 と同様、内容ごとにデータを区切った後、7 つの領域に分類した。その結果が表 12 である。

表 12　その他の困難についての言及数

領域	言語	技能	基礎	専門	援助要請	情意	環境
言及数	6	3	7	17	17	33	12

言及数は、情意、専門／援助要請、環境の順に多かった。情意領域に言及が多いのは、他の領域の困難に情意領域の困難が付随 [iv] しているためであると考えられる。以下、この点について詳しくみるために、回答データを挙げながら分析していく。回答例はいずれも調査協力者の回答をそのまま記載したものである。

言語領域に情意領域が付随している例としては、以下のようなものがある。例 (1) から、書き言葉の日本語に変換して表現することは大学院生にとって「間接

的」な表現方法であると感じ、「戸惑い」が付随していることがわかる。また、例 (2) からは、先行研究の内容理解に時間がかかることについて「疲れやすい」と表現し、気の重さを感じていることがわかる。

(1) 直接言葉で発言するのはなんとかなりますが、書く技術を使い、発言（間接的）するのは戸惑っていた。
(2) 先行研究を読む時、専門用語がたくさん出てきました。そのため、日本語の参考を読む時は、内容が理解するまで時間がかかって、疲れやすかったです。

基礎領域に情意領域が付随している記述には例 (3) がある。計画力と実行力が試される状況でのプレッシャーや、計画通りにいかない場合に罪悪感が生じていたことがわかる記述である。

(3) 事前に決められた締め切りから自分がやるべきことを逆算し、その通りに行わなければいけないというプレッシャーがあり、計画通りにならなかった場合、罪悪感と覆われる感を感じ続けていました。

専門領域に情意領域が付随している記述には、例 (4) のようにデータの扱い方に戸惑い悩んだ様子がうかがわれる記述や、例 (5) のように研究の独自性をどう出すかについて悩んだという記述がある。当該専門分野における論文の条件を満たせているかどうかについての悩みが生じていることがわかる。

(4) データが手に入れたとしても、分析に戸惑ったこともよくあります。データのばらつきやデータを使用しても NG か OK、こいうのも悩んでいました。
(5) オリジナリティを、出せるかどうかで悩んだ。

援助要請領域に情意領域が付随するとみられる記述は特に多かった。ネイティ

ブチェックを受けていないことによる不安、援助要請することにより他者から否定的な評価を受けるのではないかという不安、指導教員の変更による不安、質問することを否定されるのではないかという不安など、大学院留学生が援助要請の行動を取る際にさまざまな不安を抱えている様子がわかる。

(6) ネイティブチェックの問題（ネイティブチェックをもらわないと不安）
(7) 相談すると自分のことをどう思われるか、馬鹿にされるのではないか、相談相手に頼れられるかなどの心配、誰を信じれば良いかなどの不安が沢山ありました。
(8) 副指導変更の問題（副指導教官との関係性が心配になった）
(9) 研究上相談できる大学院の仲間がない以外、時々指導教員に研究上の悩みを相談することに困難だと感じたことも一因です。たとえば、研究上の質問をしたりすると、「この質問が難しい」と言われたこと。（中略）質問をする前に、自分の質問は先生にとっていい質問かどうかを考えると、ストレスになり、2、3 回だとすると先生に質問するのが躊躇になります。

環境領域に情意領域が付随する記述については、(10) のように自国の就職状況に照らして自分のキャリアを心配し焦ったり悩んだりしたという記述が複数みられた。また、家庭の事情で研究の継続が困難になることによるストレスや、犯罪に巻き込まれ精神的に大きなダメージを受け帰国願望が生じたという記述もみられた。

(10) 中国では 35 歳を超えると就職難になってしまうので、日本で博士学位がなかなか取れず、卒業した際 35 ギリギリになったので、すごくあせりました。
(11) 家庭事情で半年以上大学へ行けなくなり、研究や論文を進めることができなかったからストレスがたまった。
(12) 自分は日本でお金の振込詐欺に遭われた事があります。その時は精神的

に強くダメージを受け何事にも自信を無くし限界を迎え帰国しようとも思いました。

その他、情意領域単独の困難として分類したものには、研究の意義や勉強の目的がわからなくなることによる喪失感、継続的に努力し続けられない自分に対する嫌悪感の他、教員の厳しい態度や発言から受けるショックなどへの言及があった。

(13) 勉強の目的がわからなくなってきた時期がありました。
(14) 継続的に張り切って頑張れない自分が嫌になって落ち込む、またその自分がさらに嫌になるという悪循環に陥ってしまいました。

ここまでをまとめると、その他の困難として挙げられるのは以下のようなものであると言える。

・言語領域に付随する情意領域の困難：書き言葉で表現することへの戸惑いや、文献読解への気の重さ。
・基礎領域に付随する情意領域の困難：計画通りに進めることへのプレッシャーや、計画通りでないことへの罪悪感。
・専門領域に付随する情意領域の困難：論文に求められる条件がクリアできているかどうかについての戸惑いや悩み。
・援助要請領域に付随する情意領域の困難：援助要請対象者不在への不安、援助要請後の他者からの反応への不安、指導体制変更による不安。
・環境領域に付随する情意領域の困難：キャリア形成への不安、家庭の事情によるストレス、犯罪に巻き込まれた精神的ダメージ。
・情意領域の困難：研究の意義・目的の喪失、自分に対する嫌悪感、教員の態度・発言からのショック。

以上のように、論文執筆過程のあらゆる面で情意的困難が伴っており、ある領

域の困難への対処時に情意面にも配慮しながらの対処が必要となる可能性が考えられる。また、大学院留学生の教育において、さまざまなマイナスの情意を抱えながらも自らを論文完成へと方向づける力を発達させる取り組みや体制作りが求められることが示唆される。

6．まとめと今後の課題

本研究結果から、「最も困難」だとされる領域は、言語、基礎、専門の順に多いことがわかった。ここから、大学院留学生の論文執筆過程で最も困難なものとして意識されているのは、言語領域であり、母語ではない言語で論文を執筆するという留学生ならではの不安が最も大きいものとして意識されている様子がうかがえた。また、基礎領域と専門領域については日本語母語話者であっても困難な領域であるが、非母語話者である大学院留学生にとっては、外国語による思考や知識の習得が求められることになるため、認知的な負担がより大きくなるであろうと思われる。

また、「その他の困難」とされる領域は、情意、専門／援助要請、環境の順に記述が多いこともわかった。2 節で述べたように、従来の論文執筆のための授業実践では、言語、技能、基礎、専門などの領域が取り上げられてきたが、それだけでは論文を書き上げることは難しい可能性があるということが、「その他の困難」における情意、援助要請、環境領域の言及の多さから示唆される。小森（2022、2023a、2023b）で、大学院留学生の論文執筆には情意的特性や適切な援助要請のしかた、環境を制御する力なども発達させることが必要であるとされていたが、その主張が量的調査によっても支持された。

本研究では、文系大学院留学生が論文執筆の過程でどのようなことを困難だと感じたのかということを量的に調べ、その傾向を捉えたに過ぎない。大学院留学生教育に生かすためには、学位論文を書き上げた経験をもつ大学院留学生が、執筆中のさまざまな困難にどのように対処したのかについても明らかにする必要がある。また、その対処にはどのような情意的特性が必要なのかを検討することにより、大学院留学生教育に必要な情意的特性を育成する方法を考えることにつなげられるだろう。

注

i) 修士課程、博士課程、専門職学位課程の人数を合計した数である。

ii) 各領域の質問については、事前に人文科学分野の大学院留学生 5 人に予備調査（半構造化インタビュー）を行い、修士論文または博士論文執筆においてどのような困難があったかについての語りから得られた回答を参考に作成した。

iii) 二通ほか（2004）では、「問題意識」は基礎領域、「問題の設定」は技能領域とされている。本研究では、研究の問い（研究テーマ）を見つけることを基礎領域、その問いを明らかにするために研究課題を設定することを技能領域と捉えているため、質問 g は基礎領域に入れた。

iv) 技能領域以外のすべての領域について、情意領域が付随する言及があった。

参考文献

郭菲（2019）「日本の大学院の実践共同体に参加する初期段階における学習過程―ある中国人留学生のインタビュー調査から得た理解―」『阪大日本語研究』31, 17-47

木戸光子（2018）「人文系大学院における言語技術の授業実践―言語科目と専門科目における文章作成および口頭発表の役割―」『日本語教育方法研究会誌』25(1), 26-27

胡芸群（2016）「大学院で学ぶ留学生の研究に対する考え方に関する一考察―PAC 分析による事例研究―」『一橋日本語教育研究』4, 117-125

小森万里（2022）「文系大学院留学生が自らを論文作成に方向づける情意要因とは―2 名の留学生のケーススタディ―」『2022 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』261-266

小森万里（2023a）「文系大学院留学生の論文作成における困難と情緒的特性の発達―ある大学院留学生のケーススタディ―」『日本語・日本文化』50, 37-64

小森万里（2023b）「文系大学院留学生は学術論文作成上の困難をどのように乗り越えるのか―母語での論文作成経験のある留学生の場合―」『第 4 回国際シンポジウム日本語教育と日本研究～世界の潮流とベトナムの実践』40-56

佐藤勢紀子（2006）「多様な専門分野のサンプル論文を用いたアカデミック・ライティングの指導法」『専門日本語教育研究』8, 39-44

園田智子（2009）「大学院留学生の研究生活における困難度とその関連要因―理系と文系の際に注目して―」『異文化間教育』29, 64-76

田佳月（2019）「中国人留学生の学術レポート執筆不安とその変化―学習背景の違いに着目して―」『専門日本語教育研究』21, 53-60

徳田かおり（2017）「『実践レポート：大学院留学生のための論文指導講座』を終えて」『人間研究』53, 61-66

独立行政法人日本学生支援機構（2024）「2023（令和 5）年度外国人留学生在籍状況調査結

果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2024/04/data2023z.pdf（2024 年 12 月 30 日参照）
独立行政法人日本学生支援機構（2024）「2022（令和 4）年度外国人留学生進路状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2024/05/data2022s.pdf（2024 年 12 月 30 日参照）
二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子・因京子（2004）「アカデミック・ライティング教育の課題」『日本語教育学会春季大会予稿集』285-296
ニューマン S. リチャード（2008）塚野州一編訳（2009）「自己調整学習の適応的援助要請における動機づけの役割」シャンク, D. H. ＆ジマーマン, B. J. 編著『自己調整学習と動機づけ』北大路書房, 263-281
黄均鈞（2015）「ゼミ新参者のゼミへの参加意識の変化に関する事例分析―ある中国人大学院留学生への PAC 分析から見えてきたもの―」『日本語学研究と資料』38, 1-13
馬場美穂（2019）「外国人留学生の大学院学術場面への参加過程分析―2 年間の日本語によるゼミナールを中心に―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』11, 46-54
向井留実子（2018）「日本語で学位取得を目指す大学院留学生への指導・支援の課題―東京大学大学院人文社会系研究科・文学部における実践を通して―」『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』31, 49-62
向井留実子・金山泰子（2019）「日本語で学位取得を目指す大学院留学生を対象とした学業・研究活動を支える日本語教育の試み」『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』32, 139-152
村岡貴子（2014）『専門日本語ライティング教育―論文スキーマ形成に着目して』大阪大学出版会
村上康代（2018）「社会科学系大学院、専門職コース修士 1 年生留学生向け日本語アカデミック・ライティングクラスの試み―論文執筆の基本的なスキルとルールを段階的に学ぶ―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10, 98-106
文部科学省「学校基本調査 / 令和6年度 高等教育機関 学校調査 学校調査票（大学・大学院）」https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000040230331（2024年12月30日 参照）
李麗麗（2011）「中国人大学院留学生のアカデミック・インターアクションに関する調査―正統的周辺参加から十全的参加への過程の分析と考察―」『桜美林言語教育論叢』7, 17-31
レイヴ ジーン＆ウェンガー エティエンヌ（1991）佐伯胖訳（1993）『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加』産業図書
Driscoll, D. L. ＆ Wells, J. (2012) Beyond Knowledge and Skills: Writing Transfer and the Role of Student Dispositions, *Composition Forum*. 26, 1-15

付記：本研究は JSPS 科研費 JP24K03978 の助成を受けたものである。

Academic Writing Challenges Faced by International Graduate Students in the Humanities and Social Sciences: A Survey of Learners with Experience in Writing Theses in Japanese

KOMORI Mari

International students pursuing graduate studies in the Humanities and Social Sciences in Japan are expected to possess an in-depth understanding of and contribute actively to their field. Therefore, completing a thesis is considered crucial for their academic and career development. However, these students face unique challenges such as a loss of self-efficacy and isolation in the academic community (Sonoda, 2009; Guo, 2019; Tian, 2019). However, previous studies have not investigated the challenges of international graduate students from diverse perspectives including language, thought processes, academic skills, and emotions. This study aims to understand the challenges faced by international students in thesis writing; this will offer significant insights into improving their future educational practices.

In this study, we conducted a survey of 120 alumni who had written master's or doctoral theses in the humanities and social sciences in Japan. We asked 26 questions in seven categories: language, skills, fundamentals, specialization (Nitsu et al., 2004), emotions, seeking help, and environment (Komori, 2022, 2023a, 2023b).

Language, fundamentals, and specialization were regarded as the most difficult challenges. This indicates that Japanese language skills, such as appropriate styles and the accurate use of Japanese expressions suitable for academic theses, were considered the most challenging. This is particularly true for international graduate students for whom Japanese is a foreign language. While fundamentals and specialization could be difficult even for Japanese graduate students, non-native speakers face an even greater cognitive burden as they are required to think and acquire specialized knowledge in a foreign language.

Additionally, emotions, specialization, seeking help, and environment were also frequently mentioned as challenging. This suggests that education in academic writing should not only focus on fostering language, skills, fundamentals, and specialization but also on cultivating dispositions, appropriate help-seeking behaviors, and effective environmental control.